

## 調査報告

## 伊豆半島における前方後円墳の調査 — 静岡県函南町瓢箪山古墳 2016・2017 年度調査の概要 —

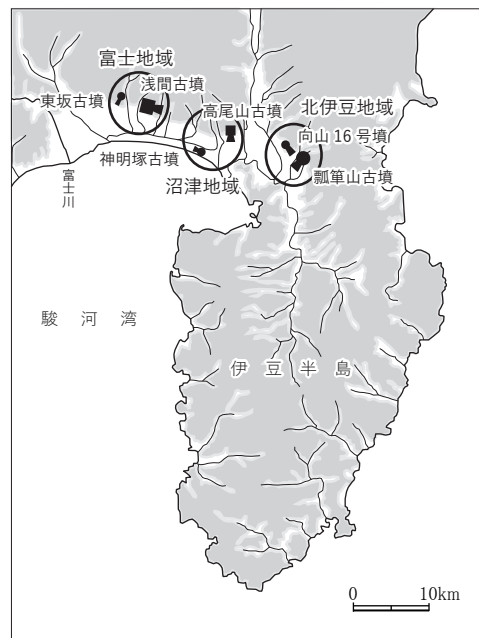
滝沢 誠・山下優介・河嶋優輝

### I. はじめに

伊豆半島は、東海地方と関東地方の境界に位置しており、東日本の太平洋岸域におけるさまざまな交流の結節点として重要な役割を担ってきた地域である。その基部にあたる北伊豆地域と沼津地域では、2000年代以降、古墳時代前期にさかのぼる前方後円墳及び前方後方墳の調査が相次いでいる（第1図）。そのうち、2007年～2009年に発掘調査が実施された沼津市高尾山古墳は、最古段階にさかのぼる大型の前方後方墳（約62m）であることが明らかとなり（池谷編 2012）、大きな注目を浴びている。また、同じく沼津地域に位置する神明塚古墳は、2003年に実施された発掘調査の結果、古墳時代前期前半の前方後円墳（約52m）であることが判明し（滝沢編 2005）、これまで前期古墳の空白域であった北伊豆地域でも、1998年～2014年に三島市向山16号墳の発掘調査が実施され、竪穴式石槨をとともなう前期前方後円墳（約70m）の存在があらたに確認されている（三島市教育委員会編 2015）。

従来、北伊豆地域では古墳時代後期の前方後円墳2基が知られていたものの、古墳時代中期以前の前方後円墳は確認されていなかった（鈴木 2001 など）。また、沼津地域でも古墳時代中期後半以降に前方後円墳が築かれたものとみられ、それ以前の大型古墳は西側の富士地域（富士市浅間古墳、同東坂古墳）に営まれたものと考えられてきた。しかし、近年の調査成果は、そうした従来の認識に大きな変更を迫るものである（渡井 2010, 滝沢 2013）。

今回報告する瓢箪山古墳は、以上のような研究状況の中であらためて注目されることとなった伊豆半島の大型古墳である。三島市の南側に位置する函南町に前方後円墳が存在することは、戦前の『静岡県田方郡史』（八木 1918）や『静岡縣史』（静岡縣編 1930）、その後編纂された『平井誌』（平井長寿会編



第1図 伊豆半島とその周辺の前期古墳

1969)などに記載があり、地元の研究者の間ではよく知られていた事実である。しかし、2001年に刊行された『静岡県的前方後円墳』では、資料の乏しさから前方後円墳としての認定が保留され、ひろくその存在が知られる契機とはならなかった(静岡県教育委員会編2001)。ところが近年になり、伊豆半島ジオパーク構想に関連して実施された航空レーザー測量で偶然に精美な墳形が確認され(笹原2016)、その報せを受けた筆者らも現地踏査(2015年3月)を実施した結果、瓢箪山古墳は残存状態が比較的良好な墳丘長80m以上の前方後円墳で、その墳丘形態や立地からみて前期古墳である可能性が高いとの認識を得るにいたった。

これまでの調査で明らかとなった伊豆半島基部における前期古墳の存在は、東日本太平洋岸域における拠点地域の形成に関する重要な手がかりを提供するものである。とくに、古墳時代初頭における拠点地域の形成については、千葉県神門古墳群などが存在する東京湾東岸地域などに多くの関心が寄せられてきたが、伊豆半島における前期古墳のあらたな発見は、東日本太平洋岸域に成立した拠点地域を広域的なネットワークの中で理解するための基本認識に大きな前進をもたらすものである。そして、その存在が再認識されることとなった瓢箪山古墳の実態解明は、そうした方面の研究をさらに深化させる重要な機会になり得るものと思われる。

今回の瓢箪山古墳の調査は、以上のような問題意識をふまえ、科学研究費・基盤研究(C)「伊豆半島の前期古墳と東日本太平洋岸域の拠点形成に関する基礎的研究」(平成28年度～平成30年度、研究代表者:滝沢誠、課題番号:16K03151)の一環として実施したものである。調査は3年計画で進めることとし、2016年度には計15日間の測量調査、2017年度には墳丘の形態や規模及び構造を把握することを目的とした計18日間の発掘調査を実施した。これらの調査には、筑波大学の大学院生・学生のほか、東京大学の大学院生・学生及び金沢大学の学生が参加した。調査はなお継続中であるが、あらたな成果を広く共有することを目的とし、本稿では瓢箪山古墳においてこれまでに実施した調査の概要を報告する。

(滝沢 誠)

## II. 瓢箪山古墳の位置と環境

### 1. 古墳の位置

瓢箪山古墳は、静岡県田方郡函南町平井字久保に所在する(第2図1)。静岡県東部の中心都市・三島市の南側に隣接する函南町は、箱根山南西麓とその南側につづく丹那山地西側の丘陵地が町域の大半を占め、町域の西端は狩野川によって形成された田方平野の一部となっている。この東西に延びる町域の北側と南側には、ともに東側の山地に源流を発する来光川と柿沢川が南西方向に流れ、町域の西側で合流したのち狩野川に注いでいる。これらの河川に挟まれるかたちで現在のJR函南駅付近から南西方向に延びる丘陵は「平井台地」と呼ばれ、その先端部には幅1.5km、標高40m前後の比較的平坦な地形がひろがっている。瓢箪山古墳は、この平坦地との比高差40～50mを測る一段高い丘陵の先端部付近に立地し、その墳頂部には標高84.93mの四等三角点(基準点名・平井)が設置されている。また、古墳の北西側は来光川によって形成された開析谷に面しており、後述するように、伊豆半島の基部を横断する交通路との関係をうかがわせる立地となっている。

## 2. 周辺の遺跡

瓢箪山古墳の周辺には、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が数多く知られている。主な遺跡としては、平井台地の西端部に伊豆通信病院敷地内遺跡（第2図4：以下、同図の番号のみを記す）や十二天遺跡（6）などがあり、平井台地と来光川に挟まれた後背湿地には仲道遺跡（9）や仁田坂遺跡（10）をはじめとする来光川遺跡群が存在する。また、来光川の西側を南流する大場川の流域でも、安久沓形遺跡（37）や中島下舞台遺跡（39）などで同時代の遺構・遺物が確認されている。

これらの中でとくに注目されるのは、瓢箪山古墳の西側眼下に位置する伊豆通信病院敷地内遺跡である。同遺跡では、これまでの度重なる発掘調査で弥生時代後期以降の遺構・遺物が多数発見されており、その集落域は古墳時代前期後半以降に拡大する傾向が認められる。その全貌は明らかとなっていないが、同遺跡は北伊豆地域における古墳時代前期後半の中核的な集落とみられ、瓢箪山古墳の造営に直接かかわった集団の居住域と想定される。

以上の遺跡は、主として弥生時代後期以降に属するものであるが、平井台地の西端部では、寺尾原遺跡（5）や仲道遺跡（9）、平井向原遺跡（15）で弥生時代中期の遺構・遺物が確認されている。それらのうち、寺尾原遺跡で発見された一辺30mを超える大型の方形周溝墓は、この一帯が弥生時代中期の段階ですでに有力な地域であったことをうかがわせる。

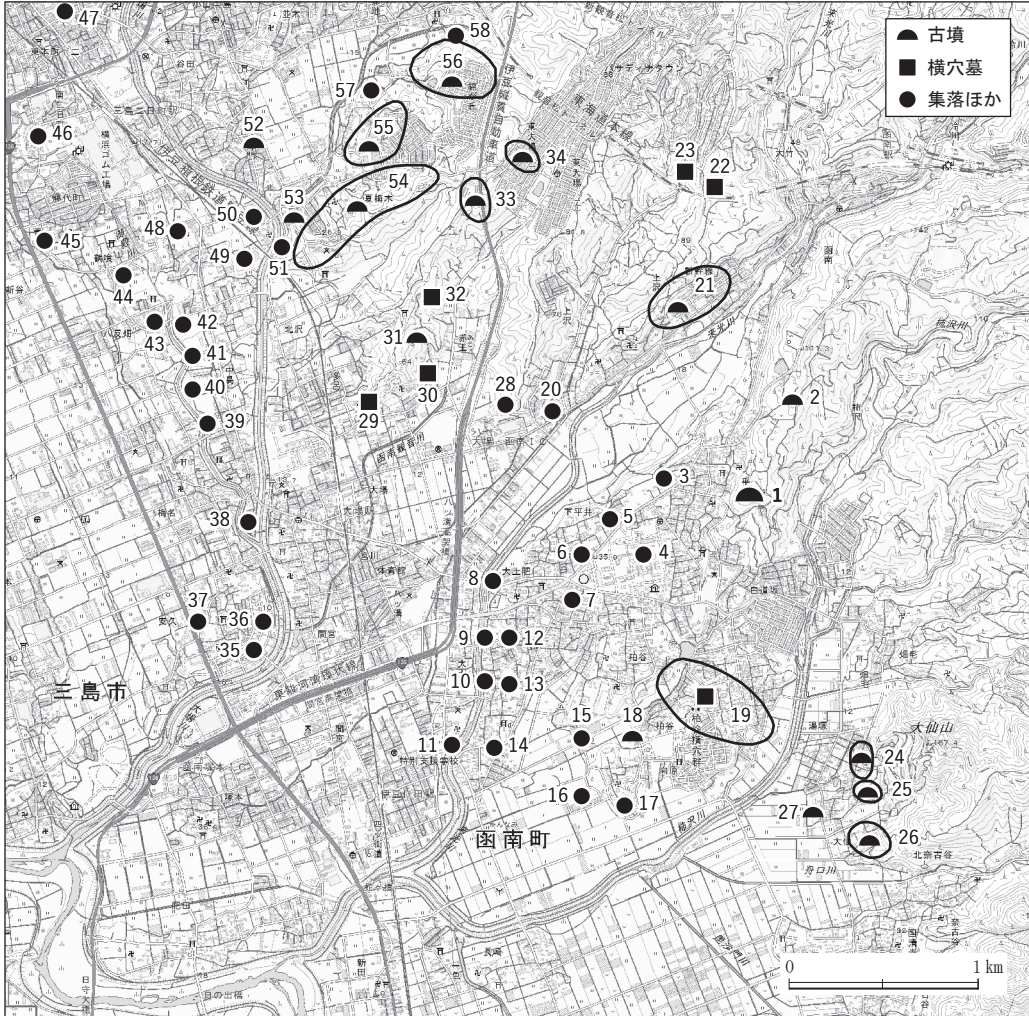
瓢箪山古墳の近辺には目立った規模の古墳は知られていないが、来光川を挟んだ対岸の台地上には、丸山古墳群（20）や落合・藤明古墳群（21）が存在する。また、南方に約1.2km離れた平井台地の南縁部には、総数300基を超えるとみられる柏谷横穴墓群（19）が一大墓域を形成している。この柏谷横穴墓群のすぐ西側には、墳丘長56mの前方後円墳とされる木戸前古墳（18）が存在する（笹原 2016）。瓢箪山古墳と同様に北伊豆地域における大型古墳の動向を把握するうえで重要な古墳であるが、基礎的な調査がおこなわれていないため、詳細は不明である。

瓢箪山古墳の周辺でもっとも注目される大型古墳は、その北西約2.7kmに位置する向山16号墳（53）である。同古墳は、あらたに発見された墳丘長約68mの前方後円墳で、古墳時代前期から後期にいたる十数基の古墳が丘陵の頂部に沿って連続的に築かれた向山古墳群（54）の最西端に位置する。1998年～2014年に実施された発掘調査の結果、後円部頂で竪穴式石槨が確認されるとともに、墳丘からは古墳時代前期中葉（大廓Ⅲ式期）の所産とみられる土器片が出土している（三島市教育委員会編 2015）。この向山16号墳の発見は、従来前期古墳の存在が知られていなかった伊豆半島の古墳時代史を大きく塗り替えるものである。また、同古墳と瓢箪山古墳が半島基部の比較的近い位置に築かれていることは、それらが成立した背景に何らかの共通した基盤があったことをうかがわせる。（滝沢 誠）

## Ⅲ. 瓢箪山古墳の測量調査

### 1. 古墳の現状

現在の瓢箪山古墳は山林の中にあり、墳丘の全体が樹木によって覆われている。とくに、後円部には篠竹が密生し、調査に際して伐採をおこなう以前は全体の見通しがきかず、前に進むのも困難な状態であった。一方、前方部は樹木に覆われているものの比較的に見通しがよ



第2図 瓢箪山古墳周辺の弥生・古墳時代遺跡

- 1 瓢箪山古墳 2 台崎古墳 3 浜井場遺跡 4 伊豆通信病院敷地内遺跡 5 寺尾原遺跡 6 十二天遺跡 7 鍛冶ヶ久保遺跡 8 ハツ溝遺跡 9 仲道遺跡 10 仁田坂遺跡 11 仁田館遺跡 12 大土肥境B遺跡 13 町屋遺跡 14 五反田遺跡 15 平井向原遺跡 16 前佃遺跡 17 向原遺跡 18 木戸前古墳 19 柏谷横穴墓群 20 丸山古墳群 21 落合・藤明古墳群 22 八重窪横穴墓群 23 穴口横穴墓 24 浜井場古墳群 25 浮名古墳群 26 花ヶ崎古墳 27 狐塚古墳 28 谷戸横穴墓群 29 如来横穴墓群 30 大場赤王横穴墓群 31 赤王法師隠古墳 32 赤王清水洞横穴墓群 33 田頭山古墳群 34 赤王山古墳群 35 安久川崎原遺跡 36 安久奥敷遺跡 37 安久杏形遺跡 38 大場中島遺跡 39 中島下舞台遺跡 40 中島上舞台遺跡 41 梅名大曲田遺跡 42 中島西原田遺跡 43 八反田前田遺跡 44 鶴喰広田遺跡 45 青木B遺跡 46 青木原遺跡 47 上才塚遺跡 48 金沢遺跡 49 城西遺跡 50 壱町田遺跡 51 道下遺跡 52 井之森古墳 53 向山16号墳 54 向山古墳群(1～15号墳) 55 夏梅木古墳群B群 56 夏梅木古墳群A群 57 猪追面遺跡 58 源平山遺跡

く、踏査の段階でも墳丘の残存状態をある程度確認することができた。

墳丘の現状で特筆すべきは、後円部頂にみられる直径7m前後、高さ0.8m程の円形の高まりである。その上部には小さな祠と江戸時代の石碑が設置され、周囲を大木が取り囲んでいる。戦前の『静岡県田方郡誌』によると、瓢箪山古墳では土器と鏡が出土したとされ（八木1918）、地元にはこの付近から出土したとされる中世陶器が残されている<sup>1)</sup>。これらの状況から判断すると、この高まりは中世の経塚である可能性が考えられる<sup>2)</sup>。

墳丘を全体としてみると、前方部の残存状態は良好であるが、後円部は各所で改変を被っている。とくに後円部の北側<sup>3)</sup>は大きく削り取られて崖となっており、その北側は開けた畑地となっている。また、後円部の西側は下半部が大きく削り取られて急崖となり、後円部の東側は以前に畑として利用された際に二段に造成され、その縁辺部には区画のための石積みが残されている。こうした後円部の状況に比べると、前方部の残存状態は比較的良好で、東側のくびれ部に畑の造成が及んでいるものの、それ以外の部分は本来の形状に近いものとみられる。

墳丘の周囲に目を移すと、墳丘の東側と西側には幅5～10m程の緩傾斜面が認められるが、それよりも外側は急な崖となっている。一方、前方部前端側は本来の地形をある程度とどめてみるとみられ、台地の斜面が南側に向かって緩やかに下降している。

## 2. 測量調査の成果

### (1) 調査の方法

瓢箪山古墳の測量調査は、2016年9月4日～17日と同年11月11日～13日の計15日間にわたって実施した。現地調査にあたっては、レーザーレベルによる標高点の観測とトータルステーションによる平面観測を組み合わせた方法を採用し、25cm毎の等高線を基本として1/100縮尺の原図を作成した。また、測量の基準点については、後円部頂の中心（O点）を通る墳丘の想定主軸線上に順次設置したのち、それらの直角方向に適宜増設していく方式を採用した。なお、基準となる標高は、後円部頂の四等三角点（標高84.93m）を利用し、方位については、基準点測量（2017年度に実施）の成果にもとづき方眼北を採用した<sup>4)</sup>。

第3図は、以上の方法によって得られた原図をトレースし、最終的に1/500の図に調整したものである。以下、同図によりながら墳丘各部の状況について述べていくが、諸般の事情により、後円部北側の崖部分になお未測量の部分があることを付記しておきたい。

### (2) 後円部

先述のように、後円部は各所で大きな改変を被っている。北側は、下半部が幅約45mにわたって大きく削り取られ、墳丘の裾部が完全に失われている。また、西側には、標高81.00m～81.50m付近に幅約4m、長さ約18mほどの平坦面が認められるが、その下方は大きく削りとられて、高さ約3mの急崖となっている。この広い平坦面は、それよりも上方の墳丘斜面が削り取られたことにより生じたものとみられるが、本来この部分に段築にとまう平坦面が存在した可能性も考えられる。東側は、墳頂部からつづく標高84.50m～83.00m付近に緩やかな傾斜面が認められるが、それよりも下方は幅約14mにわたって畑による二段の造成が

及んでおり、そのまま標高 79.75m 前後の下端部に達している。

このように後円部は多くの部分に改変が及んでいるが、東側と西側のそれぞれ北寄りの部分には一様な傾斜が認められ、本来の墳丘斜面に比較的近い傾斜を残しているものとみられる。当該部分における裾部の標高は、西側で 79.00m 前後、東側で 80.50m 前後である。

墳頂部は、後世のものとみられる高まりが中央部に存在するものの、それ以外の部分は全体として円形を呈する比較的平坦な面となっている。その標高は 84.25m ～ 84.50m で、直径は 18m ～ 20m である。また、中央部の高まりを除く、最高点の標高は約 85m である。

以上の調査事実から後円部本来の規模を把握することは困難であるが、墳丘主軸に直交する方向の東西幅は現状で約 48m である。また、墳頂部中央の高まりを除く墳丘の高さは、西側の崖下から約 7.5m、東側の下端部から約 5.5m である。

### (3) 前方部

前方部は、東側のくびれ部に畑の区画にともなう二段の造成が及んでいるが、それ以外の部分の残存状態は良好である。その平面形態は、側縁部が直線的で、前端部に向かって大きく開かない点に大きな特徴が認められる。また、立面形態をみると、西側斜面の中位にあたる標高 76.00 ～ 76.50m 付近には、側縁部に平行してつづく幅 1m 程度の平坦面が認められ、西側の斜面長は東側の斜面長に比べて明らかに長くなっている。さらに、前方部中央（横断面部分）における現状の墳端は、西側で標高 74.75m 付近、東側で標高 75.75m 付近に求められ、西側の墳端が約 1m 低い。これらの事実を総合すると、前方部の西側には、東側の墳端とほぼ同じ高さから下方に向かって築かれた一段の墳丘がともなっている可能性が高い。ただし、その両端がどのような構造になっているのかについては、現状では確認できない。

前方部頂の平坦面は、後円部側の標高 80.50m 付近から前端側の標高 78.75m 付近にかけて緩やかに下降している。その幅は、くびれ部付近で 12m 前後、前端側で 16m 前後である。

くびれ部の位置を正確に特定することができないため判然とはしないが、前方部の長さは 30m 以上に及ぶとみられる。また、両側の隅角が比較的明瞭に認められる前端部の幅は約 30m、前端部中央における墳丘の高さは約 4m である。

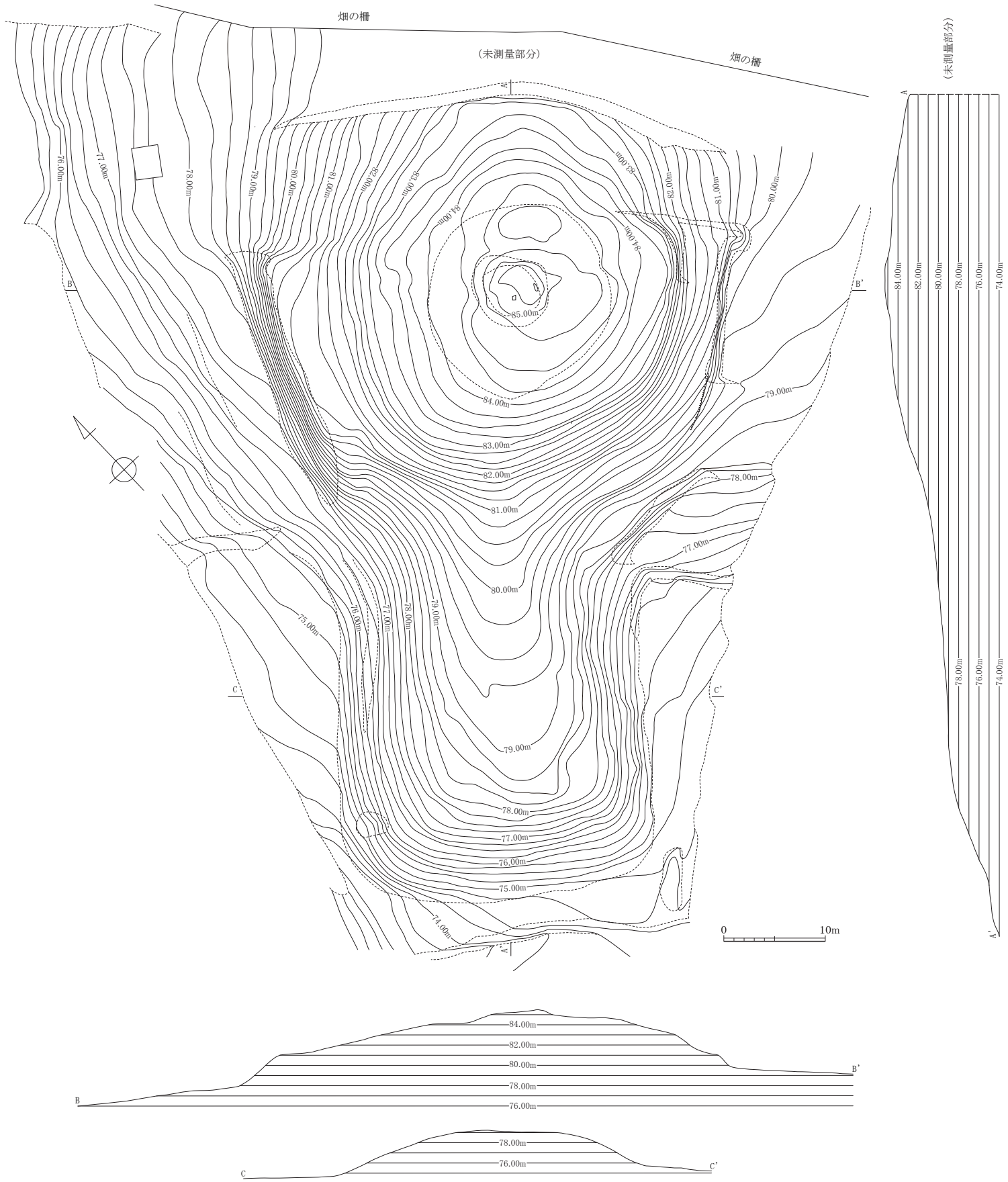
### (4) 外表施設

墳丘の表面には、拳大から人頭大程度の礫が点在している。また、今回の測量調査中には、基準杭の設置などに際して、地中のいたるところに礫の存在が予想された。さらに、『平井誌』は、かつて瓢箪山古墳の全面が葺石によって覆われていたことを伝えている（平井長寿会 1969）。古墳の一部が以前に畑として利用され、その区画に用いられた石積みが現在も少なからず認められることから、墳丘に点在する礫が古墳に本来ともなうものなのかについては、今後の発掘調査をつうじて慎重に判断する必要がある<sup>5)</sup>。

なお、測量調査の期間中、本古墳にともなうものとみられる遺物は一切採集されていない。

### (5) 測量調査のまとめ

以上に述べたように、瓢箪山古墳の後円部には少なからぬ改変が及んでいるため、測量調



第3図 函南町瓢箪山古墳測量図 (1:500)

査の成果のみによって墳丘の形態や規模を復元することは困難である。ただし、くびれ部の状況等から判断して、本古墳は前方後円墳である可能性が高いとみられる。先述のように、墳丘の西側が一段大きく造られているとすれば、その部分を加えた後円部径は50mを超え、前方部長は30m以上に及んでいる。したがって、その墳丘長は80m～90m程度とみられ、現在知られている古墳の中では伊豆半島で最大である。なお、現状における墳丘の主軸方向（前方部方向）は、N-137°-Wである。（滝沢 誠）

#### Ⅳ. 瓢箪山古墳 2017 年度発掘調査の概要

##### 1. 調査の目的と方法

2016年度に実施した測量調査の成果をふまえ、2017年9月4日～23日の計18日間、瓢箪山古墳の形態や規模、墳丘構造をさらに詳しく把握することを目的として、合計6地点でトレンチ調査を実施した（第4図）。まず、後円部については、墳丘主軸に直交する東西方向の裾部に、それぞれ第1トレンチ、第2トレンチを設定した。また、くびれ部については、西側くびれ部に第3トレンチ及び第6トレンチを設定した。さらに、前方部の西側には墳丘の段構造を確認することを視野に入れながら第4トレンチを設定し、前方部前端の裾部には第5トレンチを設定した。これらの調査区をあわせた今回の調査面積は合計で41.5㎡である。（滝沢 誠）

##### 2. 後円部の調査

###### (1) 第1トレンチ

墳端の検出と周溝の確認を目的とし、墳丘の西側に幅1.0m、長さ8.0mのトレンチを設定した。トレンチは、後円部西側の最大径付近と予想される位置に、墳丘の主軸と直交する方向に設定した。後円部の中心からトレンチ西端までの距離は38.5mである。

地山面<sup>6)</sup>までの堆積は、浅いところで約20cm、深いところで約80cmであった。トレンチ東端から1.0m付近、標高約77.3mの地点において地山が傾斜を開始し、2.1m付近にかけて約70cm落ち込んでいた。そこからトレンチ西端へは、緩やかな傾斜をとまないうちで下降していく状況が観察された。遺物は出土していない。

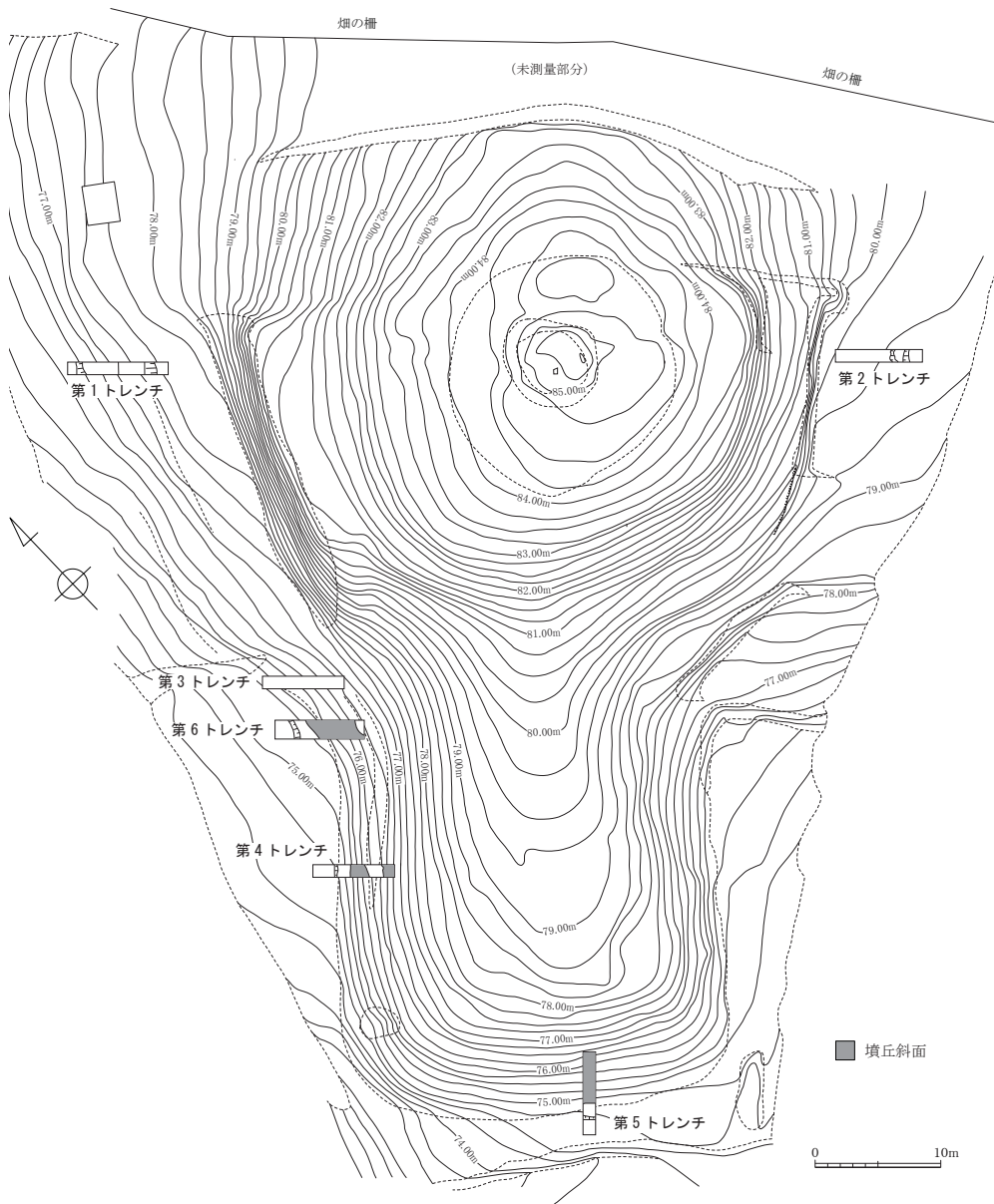
本トレンチの東側で検出された落ち込みは、覆土の堆積状況を見るかぎり後世の改変によるものと推測されるが、墳裾部の傾斜にかかわる可能性も残されている。

###### (2) 第2トレンチ

第1トレンチの反対側にあたる墳丘東側の平坦面に、墳端及び周溝の確認を目的として、幅1.0m、長さ7.0mのトレンチを設定した。トレンチは墳丘の主軸と直交し、後円部の中心からトレンチ東端までの距離は29.5mである。

本トレンチは、畑の造成により墳裾部が完全に削平されている部分にあたる。地山面までの堆積は、浅いところで約10cm、深いところで約90cmであった。地山は、トレンチ西端から4.5m付近まで緩やかに下降し、そこから約0.2m進む間に約20cm落ち込んでいた。さらに、0.7mほど平坦面をもって進んだのち、西端から5.9m付近にかけて約35cm落ち込む状況が



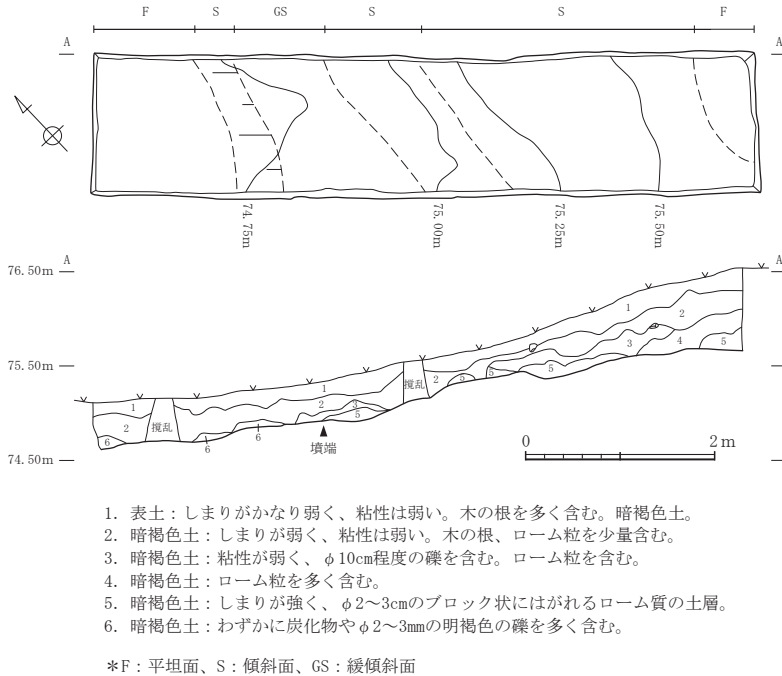


第4図 瓢箪山古墳 2017年度発掘調査トレンチ配置図 (1 : 600)

観察された。落ち込んだ地点の標高は約 78.3m である。遺物は出土していない。

トレンチの西端から 4.5m 付近までの緩斜面や、その東側にみられた約 0.7m の平坦面は、後世の削平によるものとみられるが、覆土の状況から判断すると、トレンチ東端側の落ち込みは本古墳に関係するものと考えられる。ただし、この落ち込みが墳端に相当するのか、第 4～6 トレンチで検出されたような墳端よりも外側の掘り込み（後述）にかかわるのかは、現時点では判断できない。

伊豆半島における前方後円墳の調査



第5図 第6トレンチ平面図・断面図（1：80）

(3) 第3トレンチ

くびれ部の検出を目的とし、墳丘西側の斜面に幅1.0m、長さ6.5mのトレンチを設定した。トレンチは墳丘の主軸と直交し、主軸からトレンチ西端までの距離は23.0mである。

墳丘構築面と考えられる土層までの堆積は、浅いところで約40cm、深いところで約80cmであった。トレンチ東端から西端へ、緩やかな傾斜をとめないながら下降していく状況が観察されたが、本トレンチ周辺は広く竹類が生い茂っているため、全体的に堆積の状況は良好ではない。遺物は出土していない。

(4) 第6トレンチ（第5図）

第3トレンチの調査成果をふまえ、調査期間後半に設定したトレンチである。くびれ部の検出を目的とし、墳丘西側の斜面に、幅1.5m、長さ7.0mのトレンチを設定した。トレンチは墳丘の主軸に直交する軸線に沿い、主軸からトレンチ西端までの距離は22.0mである。

本トレンチの東側では地山削り出しによる墳丘構築面が認められ、構築面までの堆積は、浅いところで約30cm、深いところで約85cmであった。第3トレンチと同様に竹類による攪乱がみられたが、堆積状況は比較的良好である。東端から1.4m付近まではやや平坦な面が認められ、その部分の標高は約75.6mである。そこから、東端より3.3m付近まで進む間に、緩やかに約30cm下降していく。さらに、東端より3.3m付近から4.4m付近にかけては約30cm落ち込み、この下端ラインが墳端にあたると思われる。墳端の標高は、約74.9mである。

その先は再び傾斜が平坦気味になり、東端より 5.4m 付近から 5.7m 付近にわたってみられる約 10cm のやや明瞭な落ち込みを経て西端にいたる。遺物は出土していない。

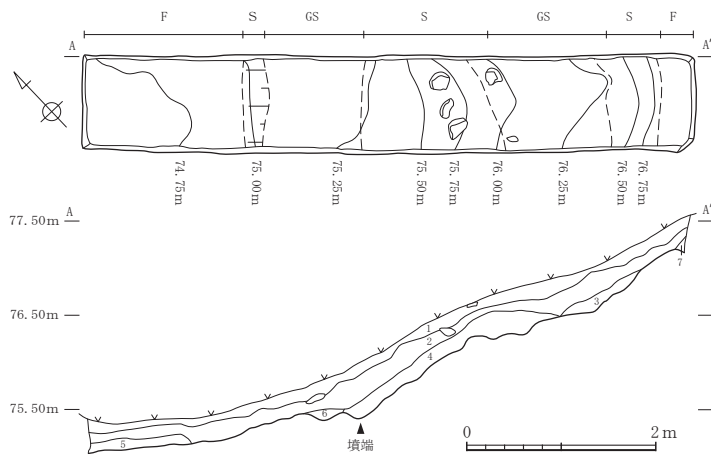
このように第 6 トレンチでは、トレンチ東側で検出された墳丘の平坦面、中央の墳端と考えられる部分、西側の小さい落ち込み等が確認された。また、本トレンチでは、墳端のラインが北西側から南東側へ、外側に向かってやや弧を描くように検出された。その所見にもとづくならば、第 6 トレンチの付近は後円部に該当し、くびれ部はさらに南側に存在することが予想される。  
(山下優介)

### 3. 前方部の調査

#### (1) 第 4 トレンチ (第 6 図)

前方部西側の墳端及び段築の確認を目的として、幅 1.0m、長さ 6.5m の主軸に直行する東西方向のトレンチを設定した。現地表面が平坦になっているトレンチ西端付近を掘り下げた結果、地山を整形したとみられる平坦面が検出されたため、トレンチの東側に向かって順次掘り下げを進めた。

調査の結果、トレンチの東端から西へ 0.1 ~ 3.4m の範囲で地山を削り出したとみられる墳丘構築面が検出された。トレンチ東端から西に 0.1m の範囲では、地山を削り出した面がより西側の斜面とは異なる傾斜角を示すが、トレンチ外となるためより東側の状況を確認することはできなかった。この地点より西側の傾斜面は、トレンチ東端から約 0.9 ~ 2.2m の範囲



1. 表土：しまりが弱く、粘性が弱く、粒子は荒い。暗褐色土。
2. 暗褐色土：粘性が弱く、粒子は細かい。
3. 褐色土：粒子が荒い。
4. 暗褐色土：しまりが強く、粒子は細かい。ローム粒を多く含む。
5. 極暗褐色土：粒子が細かい。ローム粒を含む。
6. 暗褐色土：しまり、粘性、粒子ともに特長がない。
7. 暗褐色土：粘性弱く、ローム粒を多く含む。

\*F：平坦面、S：傾斜面、GS：緩傾斜面

第 6 図 第 4 トレンチ平面図・断面図 (1 : 80)

に存在するテラス状の緩傾斜面を挟んで東西に分けられるが、緩傾斜面の西側と東側で傾斜角に大きな違いは認められない。この傾斜はトレンチ東端から西へ約 3.4m、標高 74.70m の地点で終わり、幅 1.2m 程度の平坦面を挟んだのち、トレンチ東端から約 4.7m の地点に存在するわずかな落ち込みを経て、その西側は再び平坦面となっていた。

本トレンチでは、直径 6.5 ～ 26.0cm で平均直径 15cm 程度の円礫が 20 点以上出土した。円礫は表土から地山直上までの堆積層全体に分布し、また平面的にもトレンチ内に広く分布していた。トレンチ西端から東へ 2.8 m の地点では、暗褐色土上で円礫が 4 個、斜面に直行するかたちで並んで検出され、葺石に類するものとも考えられたが、調査を進める過程で地山を削り出した面より上の層に載っていることが判明したため、墳丘表面に葺かれていたものである可能性は低いものと判断した。

本トレンチで検出された墳丘構築面中位の緩傾斜面は、その位置と幅から判断して、墳丘の段築にともなうものである可能性が高い。この緩傾斜面は、標高約 75.8m から 75.4m の範囲に存在する。また、トレンチ東端から西へ 4.7m の位置に存在する落ち込みは、覆土の堆積状況から後世の改変によるものとは考えられず、墳丘の外側にともなう掘り込みにかかわるものとみられる。なお、トレンチ東端付近で地山削り出し面の傾斜角は変化しており、その面の上には西側の傾斜面に接続するかたちで堆積した土層（第 7 層）が存在する。この土層の性格としては墳丘の盛土、旧表土などの可能性が考えられるが、確認できた範囲が狭く明確な結論を得るにはいたっていない。

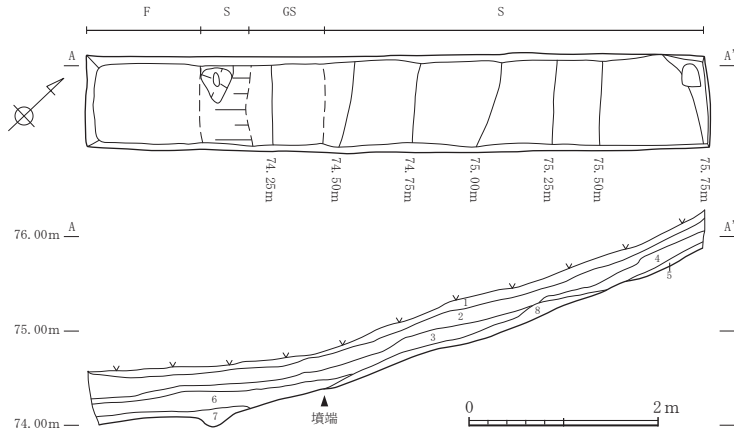
## (2) 第 5 トレンチ (第 7 図)

前方部南側の墳端を確認することを目的として、主軸に平行する方向に設定した幅 1.0m、長さ 6.5m のトレンチである。

調査の結果、トレンチ北端から南へ約 5.3m の地点にかけて地山を削り出した傾斜面が検出された。この傾斜面は、トレンチの北端から南へ約 4 m の地点までつづいていた。その南側には幅約 0.8m の緩傾斜面が存在し、深さ約 10cm のわずかな落ち込みを経て、さらに南側は平坦面となっていた。なお、本トレンチでは、第 4 トレンチで確認されたような墳丘中位の平坦面は検出されなかった。

トレンチ北端から約 4m までつづく傾斜面は、覆土の堆積状況から後世の改変はほとんど及んでいないとみられ、地山を削り出した墳丘構築面である可能性が高い。したがって、前方部前端側の墳端はその下端部、標高 74.40m 付近に求められる。

第 4 ～ 6 トレンチの調査結果から、墳端とみられる地点の外側に幅約 1m 前後の平坦面もしくは緩傾斜面が存在することが判明した。この面はいずれも墳端から始まり、約 1m 離れて存在する 10 ～ 20cm 程度の落ち込みで終わっている。この面とそれにつづく落ち込みの性格は明確ではないが、堆積状況から後世の改変によるものとは考えられず、墳丘に付随する周溝などの施設にかかわる可能性が考えられる。(河嶋優輝)



1. 表土：しまりが弱く、粘性は弱い。
2. 暗褐色土：しまりが弱く、粘性は弱い。
3. 褐色土：しまりが弱く、粘性は弱い。
4. 明褐色土：しまりが弱く、粘性は弱い。
5. 明褐色土：粒子が細かい。
6. 暗褐色土：しまりが弱い。
7. 明褐色土：粘性が強く、粒子は細かい。
8. 明褐色土：しまりが強く、粘性が強く、粒子が細かい。

\*F：平坦面、S：傾斜面、GS：緩傾斜面

第7図 第5トレンチ平面図・断面図（1：80）

## V. まとめ

### 1. 墳丘の特徴

冒頭でも述べたように、瓢箪山古墳の調査はなお継続中である。したがって、あくまでも現時点での理解にすぎないが、最後にこれまでの調査によって得られた成果と課題を整理しておきたい。

瓢箪山古墳において初めてとなる今回の調査では、その墳形と規模に関する一定のデータを得ることができた。墳形については、前方後方墳ではないかとの疑いもたれていたが、第6トレンチの調査成果が示すように、前方後円墳とみるのが妥当である。ただし、第6トレンチでは、西側くびれ部の検出にいたっておらず、東側のくびれ部についても未調査であるため、墳形については、それらの調査を待つ最終的な判断を下す必要がある。

墳丘の規模については、後円部に関するデータがなお不足しているため、詳細な復元案を得るにはいたっていない。ただし、第2トレンチで検出された落ち込みを、墳端もしくは墳端外側の掘り込みとみなすならば、後円部の直径は50m台後半になるものと考えられる。これに、第5トレンチで前端が確認された前方部の長さを加えると、本古墳の墳丘長は87m前後に復元される。

今回の発掘調査における重要な成果の一つといえるのは、第4トレンチで墳丘の段構造を確認したことである。測量調査の段階で、前方部西側の墳丘斜面にわずかな平坦面が存在し、前方部西側の墳丘斜面が明らかに長いことが注意されていた。第4トレンチでは、まさにそ

の部分に段構造の存在を示す平坦面が確認されたが、同様の平坦面は、くびれ部に近い後円部側の第6トレンチでも確認された。したがって、この平坦面は、前方部の西側のみならず、後円部の西側にも何らかのかたちでつづいている可能性がある。また、前方部西側の中位に認められる平坦面と前方部東側の墳端はほぼ同じ標高を示すことから、本古墳では、墳丘の西側にのみ下段の墳丘を造りだしているものとみられる。この点については、前方部東側の状況を含めて、今後の調査でさらに確認を進めていく必要がある。

墳丘に関するデータが少なからず得られた一方で、今回の調査をつうじて本古墳の年代を推定し得るような遺物を獲得することはできなかった。したがって、本古墳の年代については、あらたに把握された墳丘形態の特徴にわずかな手がかりを求めるほかはない。現状では詳細な復元案を示すにはいたっていないが、本古墳の墳丘長に占める前方部長の割合は35%程度で、前方部は明らかに短い。また、前方部の側縁は直線的で、前端に向かって大きく開くことはない。加えて、残存状態が良好な前方部の高さは、後円部に比べて6m余りも低い。これらの特徴から判断すると、本古墳の墳丘形態は、前方部の平面形態が前端に向かって開いていく三島市向山16号墳よりは後出的な特徴を備えているとみられる。葺石の有無については引きつづき確認が必要であるが、かりに葺石をとまなうものとすれば、それも後出的な要素の一つとなり得る。現状では、上記のような墳丘形態の特徴を重視し、本古墳の年代については、向山16号墳に後続する古墳時代前期後半の範囲で理解しておくこととしたい。

## 2. 瓢箪山古墳の評価に向けて

以上のように、今回の調査によって瓢箪山古墳に関する重要な学術的データが得られたが、個々の事実認識をめぐっては、残された課題が少なくない。それらについては、今後の調査をふまえてさらに検討を進めていきたいと考えているが、本稿を終えるにあたり、これまでの調査によって浮かびあがってきた瓢箪山古墳の歴史的位置づけについて若干の見通しを述べておきたい。

瓢箪山古墳が立地する平井台地の北西側には、丹那山地に源を発する来光川によって形成された開析谷が延びている。現在、この谷筋に沿って半島西側の函南町から半島東側の熱海市へ抜ける峠越えの道路がつうじているが、このルートは古くから半島の基部を横断する陸路の一つとして利用されてきたものである。瓢箪山古墳は、まさにその西側山麓の基点に位置し、同ルートに沿った台地上に側態を示すかのように築かれている。しかも、今回の調査で明らかとなったように、同ルートに面した墳丘の西側をより大きく構築しているとみられる点はきわめて重要である。こうした立地特性とあらたに判明した墳丘構造は、瓢箪山古墳の造営が半島基部を横断する交通路を強く意識したものであったことをうかがわせるものである。

そこで集落の動向についてみると、瓢箪山古墳の西側眼下に位置する伊豆通信病院敷地内遺跡では、古墳時代前期後半に集落が拡大する傾向が認められる。これは、北伊豆地域における拠点的な集落が、弥生時代後期後半に盛期をもつ伊豆の国市山木遺跡の周辺から平井台地の周辺に移動したことを示唆するものである<sup>7)</sup>。

これらのことをふまえて、あえて見通しを述べるならば、この拠点移動と半島基部を横断

する交通路の利用とは無関係ではなく、あらたな地域基盤の形成を企図した一連の動きであった可能性が考えられよう。こうした動きは近隣地域でも認められ、古墳時代前期後半に位置づけられる神奈川県逗子市・葉山町長柄桜山1号墳（前方後円墳・91.3m：佐藤・山口2012）、同2号墳（前方後円墳・88m：同左）は、三浦半島の基部を横断するルート沿いに築かれている。以上の点を考えあわせると、瓢箪山古墳が造営された背景には、短距離移動が可能な陸路を積極的に組み込んだ太平洋岸ルートの整備という、あらたな動きがあったものと推測される<sup>8)</sup>。その具体像に迫るにはさらなる調査・研究を要するが、瓢箪山古墳の歴史の評価に向けては、上記のような視点からの理解が不可欠であろう。（滝沢 誠）

## 謝辞

今回の調査を実施するにあたっては、地権者の皆様方に多大なるご協力をいただいた。あらためて厚く御礼を申し上げます。また、現地での調査にあたっては、函南町教育委員会、静岡県教育委員会、養徳寺にご協力をいただくとともに、函南町文化財保護審議会会長の齋藤宏氏、研究協力者である渡井英誉氏、菊池吉修氏、佐藤祐樹氏、笹原芳郎氏、笹原千賀子氏、戸田英佑氏、田村隆太郎氏、池谷信之氏に多くの有益なご助言をいただいた。さらに、調査期間中には多くの研究者、関係者の皆様方に現地にお越しいただいた。関係各位には、あらためて感謝の意を表したい。

なお、本稿は、平成29年度科学研究費・基盤研究(C)（研究課題：伊豆半島の前期古墳と東日本太平洋岸域の拠点形成に関する基礎的研究、研究代表者：滝沢 誠、課題番号：16K03151）の助成を受けて実施した研究成果の一部である。

## 註

- 1) 『静岡縣田方郡誌』には、「古墳所在地表」の中に「一、函南村平井養徳寺裏山 瓢塚(？)、土器鏡を出す」との記載がある（八木1918：645頁）。また、『静岡縣史』第1巻は、管玉と鉄鎌の出土について記している（静岡縣編1930）。『平井誌』によると、瓢箪山古墳の出土遺物は、その後静岡県立葦山高等学校に収められたとのことであるが（平井長寿会編1969）、現在の同校には、それに該当するとみられる遺物は収蔵されていない。なお、後円部側の地権者が伝え聞いたところによると、かつての掘削で遺物が出土したのは、後円部頂のほぼ中心に位置する高まりの東側であるという。
- 2) 後円部頂では、2016年度の測量調査期間中に地中レーダー探査を実施した。その成果については、あらためて報告の機会を設けることにしたい。
- 3) 本古墳は、後円部を北東側、前方部を南西側に向けているが、今回の報告では便宜上、後円部後端側を「北側」、前方部前端側を「南側」とし、墳丘主軸に直交する方向をそれぞれ「東側」「西側」として記述を進める。
- 4) 瓢箪山古墳の基準点測量については、株式会社フジヤマに委託し、2017年9月7日に実施した。
- 5) 地権者が伝え聞いた話によると、畑の石積みに利用された礫が古墳以外の場所から搬入されたことはないという。
- 6) 第1トレンチと第2トレンチで確認された地山面には、粒径3cm～5cm程度の橙色の軽石が多く含まれていた。この層位は、中部ローム層中の箱根三島軽石層とみられる。

- 7) この点については、本研究の研究協力者である渡井英誉が検討を進めている。
- 8) 本研究の研究協力者である佐藤祐樹は、近年こうした視点から駿河の前期古墳に関する検討を進めている（佐藤 2012）。

#### 参考文献

- 池谷信之編 2012 『高尾山古墳発掘調査報告書』沼津市教育委員会。
- 笹原芳郎 2016 「ジオ・アーケオロジーによる前方後円墳の再確認」『静岡県考古学研究』No.47 静岡県考古学会 81-92 頁。
- 佐藤仁彦・山口正憲 2012 『国指定史跡長柄桜山古墳群第1号墳発掘調査報告書』逗子市教育委員会・葉山町教育委員会。
- 佐藤祐樹 2012 「駿河における前期古墳—古墳の景観と路の視点から—」『東日本における前期古墳の立地・景観・ネットワーク』第17回東北・関東前方後円墳研究会大会 東北・関東前方後円墳研究会 27-52 頁。
- 静岡県編 1930 『静岡縣史』第1巻 静岡縣。
- 静岡県教育委員会編 2001 『静岡県の前方後円墳—資料編—』静岡県教育委員会。
- 鈴木敏則 2001 「県内前方後円墳の編年観」『静岡県の前方後円墳—総括編—』静岡県教育委員会 216-220 頁。
- 滝沢 誠 2013 「駿河における前期古墳研究の成果と課題」『駿河における前期古墳の再検討』静岡県考古学会 5-10 頁。
- 滝沢 誠編 2005 『神明塚古墳（第2次）発掘調査報告書』沼津市教育委員会。
- 寺沢 薫 2011 『王権と都市の形成史論』吉川弘文館。
- 平井長寿会編 1969 『平井誌』平井長寿会。
- 三島市教育委員会編 2015 『三島市埋蔵文化財発掘調査報告』補助事業版第1号 三島市教育委員会。
- 八木昌平 1918 『静岡縣田方郡誌』静岡縣田方郡役所。
- 渡井英誉 2010 「東駿河における布留式併行期の様相（補遺）—前期古墳の年代を再検討する—」『静岡県考古学研究』No.41・42 静岡県考古学会 105-118 頁。

#### 図表出典

- 第1・3～7図 筆者作成。
- 第2図 国土地理院二万五千分の一地形図をもとに作成。